

## 「ペヌエルでの格闘」

2021年04月28日

男は言った。「あなたの名はもはやヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。あなたは神と闘い、人々と闘って勝ったからだ。」ヤコブが、「どうか、あなたの名前を教えてください」と尋ねると、男は、「どうして、私の名前を尋ねるのか」と言って、その場で彼を祝福した。ヤコブは、「私は顔と顔とを合わせて神を見たが、命は救われた」と言って、その場所をペヌエルと名付けた。(創世記 32 章 29 節～31 節)

ヤコブは、兄エサウと再会するために、怒りと殺意に燃えていたエサウを宥める贈り物を膨大に用意した。怒りが収まらず殺害に及んだ場合には、逃亡の手だても整えた。夜中に起きて、二人の妻、二人の召し使いの女、11 人の子どもたちを引き連れ、ヤボクの渡しを渡らせ、自分の持ち物も運ばせた。ヤコブはただ一人、後に残った。すると、ある男が現れ、夜明けまで彼と格闘した。男とは誰か。神であろう。ヤコブは、兄エサウを恐れ、不安と恐怖に苛まれた。その恐怖を祈りで乗り越えようとした。その祈りを神との格闘と捉えている。ところが、男は勝てないと見るや、ヤコブの股関節に一撃を与えた。ヤコブの股関節は格闘しているうちに外れてしまった。男は、「放してくれ。夜が明けてしまう」と叫んだが、ヤコブは、「いいえ、祝福してくださるまでは放しません」と言った。彼は、神に「祝福してくださるまでは放しません」、エサウとの再会を平和裏に実現させてくださいと食らいついたのである。ヤコブの祈りがいかに深刻な求めであったかを示している。男が、「あなたの名前は何と言うのか」と尋ねるので、「ヤコブです」と答えた。男は、「あなたの名はもはやヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。あなたは神と闘い、人々と闘って勝ったからだ」と言った。ヤコブ（かかとをつかむ者＝人を出し抜く者）ではなく、イスラエル（神、支配したもう）という名誉ある名前が与えられた。以来、ヤコブは神の民イスラエルの祖と位置づけられていく。ヤコブが、「どうか、あなたの名前を教えてください」と尋ねると、男は、「どうして私の名前を尋ねるのか」と言って、その場で彼を祝福した。神はヤコブの執拗な祈りに根負けした。ヤコブは岳父ラバンとの駆け引きに勝ち、兄エサウとの再会も首尾よく実現すると祝福された。ヤコブは、「私は顔と顔とを合わせて神を見たが、命は救われた」と言って、その場所をペヌエルと名付けた。神の顔を見た者は死ぬと言われていたが、神と顔を合わせ、格闘したが、生きてると喜んだ。名付けたペヌエルは「神の顔」という意味である。

ヤコブ物語は、創世記の中核をなしていると言う人がいるくらいヤコブは重要な人物である。ペヌエルでの格闘の出来事はヤコブ物語の頂点に位置している。彼は、事ある毎に祭壇を築き、主の名を呼ぶ祈りの人であった。ペヌエルでは、神に祈り、神と格闘して勝ったと伝えている。神が負けるはずがないが、負けてくださった。負けることによって、ヤコブを生かし、立てたのである。主イエスは人間の罪に負けて、十字架で死んでくださった。その主イエスの敗北によって、人間を赦し、生かしてくださった。神は、主イエスの敗北によって人を真に生きる者へと祝福し、救ってくださったというのが福音の核心である。人は勝つことを目指して奮闘し、上に立とうと懸命であるが、負けて生かすのが「神の愛」なのである。ヤコブは神の敗北を体験し、立って、エサウとの再会に向かった。彼がペヌエルを立ち去る時には、日が昇っていたが、腿を痛め、足を引きづっていた。以来、イスラエル人は、ヤコブが一撃された股関節の上の腰の筋を食べない。ヤコブへの敬意を食べないことによって表わすようになったと伝えている。